様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：３２６３１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2013
課題番号：２４６５３２１５

研究課題名（和文）日本人女性心理学者と欧米の心理学者の交流史に関する質的研究

研究課題名（英文）A qualitative study on the history of interpersonal contact between Japanese female psychologists and western psychologists.

研究代表者
高橋　雅延（TAKAHASHI, Masanobu）

聖心女子大学・文学部・教授

研究者番号：１０２０６８４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,700,000円、（間接経費）　810,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、さまざまな年代（中高年など）の日本人女性心理学者を対象に1人あたり約90分間の非構造化インタビューによる面接調査を行った。その結果、受けてきた教育、欧米の研究者との交流、家庭における役割において大きな世代差の存在することが明らかとなった。この世代差の原因としては、大学の教育システムや社会状況の変化が示唆された。

研究成果の概要（英文）：In the present study, various generations of Japanese female psychologists were interviewed on psychological education and interpersonal contact with western psychologists.The results showed a generation gap, which was caused by changes in the social situation and educational system.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・実験心理学

キーワード：心理学史　エスノセントリズム　ジェンダー　非構造化インタビュー

１．研究開始当初の背景

一般に、19 世紀に哲学から独立した西欧に根ざした心理学の歴史は浅いと言われるものの、それでも 100 年以上の歴史を背負っている。そのため、最先端の新しい理論や研究方法の萌芽の多くが過去の歴史の中に埋もれていることが少なくない。たとえば、喜怒哀楽などの感情の生起について、現在は身体面からのアプローチを考えることが一般的になってきている。しかし、このようなアプローチを支える理論は、すでに心理学の初期にウィリアム・ジェームズによって主張されていたことであった。このような例からも明らかなように、心理学史の研究や学習は、単に過去を掘り起こすという受動的かつ非生産的な活動ではなく、新しい理論や研究方法を生みだすための能動的かつ創造的な活動として位置づけられるのである。

このような認識が次第に共有されつつある一方で、現在の心理学史の研究には大きく２つの問題点が指摘できる。すなわち、第１の問題点とは、心理学のルーツが西欧哲学にあったことからやむを得ない部分があるとは言え、今なお、欧米人だけの観点から心理学史を構成し考察を行うというエスノセントリズムの存在である。第２の問題点は、男性研究者の視点に偏り、男性心理学者の活躍だけを取り上げるというジェンダーバイアスというものである。

事実、第１の欧米中心のエスノセントリズムのため、欧米以外の国の心理学者が心理学史の中で取りあげられることはめったにない。たとえば、日本の心理学との関連性を見ると、今なお定評のある古典的な心理学史のテキスト（Boring, 1950, *A History of Experimental Psychology,* 2nd ed. Prentice-Hall.）には、松本亦太郎の名前が一カ所（528 頁）に登場するだけである。この傾向は、版を重ねている心理学史の標準的なテキスト（Schultz & Schultz, 2007, *A History of Modern Psychology*, 9th ed. Wadsworth.）でも変わらず、日本人心理学者の記述は見られない。この傾向は日本人の執筆した日本語の心理学史のテキストでもまったく同様である。たとえば 1994 年発行の日本語のテキスト（梅本堯夫・大山正（編著）『心理学史への招待』サイエンス社）では最終章に「日本の心理学」という章が存在するが、そこに記載されている日本人心理学者たちは基本的に欧米の心理学を受動的に学び取っていたかのような記述となっている。もちろん、これらのエスノセントリズムへの反省もあって、最近では日本も含めた世界 27 カ国の心理学の歴史を網羅したハンドブック(Baker, 2012, *The Oxford handbook of the history of psychology: Global perspectives.* Oxford University Press.)も出版されている。しかしながら、それらの記述を見る限り、まだまだ心理学の中心が欧米にあることを残念ながら認めざるを得ない。

第２の問題点であるジェンダーバイアスは、心理学史において男性心理学者の活躍が中心で、女性心理学者の記述がきわめて少ないということである。たとえば、20 世紀の著名な心理学者トップ 100 を調査した研究では、そこに登場する女性心理学者はわずか６名に過ぎず、しかも最上位は目撃証言の研究で有名な Elizabeth Loftus の 58 位である（Haggbloom et al., 2002, The 100 most eminent psychologists of the 20th century. *Review of General Psychology*, **6**, 139-152.）。このようなジェンダーバイアスは、やはり日本でも変わらず、たとえば先に引用した 1994 年発行の日本語のテキスト（梅本堯夫・大山正（編著）『心理学史への招待』サイエンス社）では、女性心理学者として Maria Montessori だけが引用されているにすぎない。しかも、最終章の「日本の心理学」という章の中では日本人女性心理学者への言及

は皆無である。

研究代表者は過去８年間にわたり心理学史を大学生（主として女子学生）に教える中で、現在の心理学史におけるエスノセントリズムとジェンダーバイアスという問題点に行き当たり、日本の心理学との関連性や女性心理学者の活躍を取り入れた心理学史を再構築する必要性を強く感じるようになった。

その一方で、研究代表者が過去に編集委員をつとめたこともある日本心理学会発行の『心理学ワールド』の連載記事（たとえば、「Over Seas」「Ex-Over Seas」）などを見ると、現在活躍中の日本人心理学者（女性も含む）が、欧米の著名な研究者と公私にわたって深い交流のあることがうかがえる。また、研究代表者が平成 22 年度の１年間にわたる研修休暇年に、日本心理学会の学会誌である『心理研究』『心理学研究』全巻を通読する中で、実は、日本の心理学者と欧米の心理学者の交流が（戦中、戦後の一時期をのぞいて）古くから行われていたことを再認識するに至った。

２．研究の目的

本研究の目的は、現在の心理学史に内在する２つの問題点、すなわち第１に、欧米人の観点を中心としたエスノセントリズム、第２に、男性中心のジェンダーバイアスという問題点を日本人心理学史研究者としての視点から明確化することであった。それと同時に、これらの２つの問題点を克服するような新たな視点からの心理学史の可能性を模索することであった。そこで、対象者を日本の（中高年の）女性心理学者に限定した上で、彼女たちと欧米の心理学者との交流（ここで言う交流は実際の人間的な交流だけではなく、論文の上での交流や学会発表など広い意味である）の歴史について、主として非構造化インタビュー調査によって検討した。

３．研究の方法

本研究でターゲットとする日本人女性心理学者と欧米の心理学者との交流史については、たとえば、日本人最初の女性心理学者であった原口鶴子（旧姓、新井）を事例として挙げることができる。原口鶴子は、日本女子大学を 20 歳で卒業後、明治 40（1907）年、単身アメリカ（Columbia 大学）に渡り、苦労の末、学習心理学で著名な Thorndike のもとで心理学の PhD を取得した。この原口鶴子に関しては、本間による研究（本間道子，2001，教育心理学者：原口鶴子の軌跡，心理学史・心理学論，3，1-10.）があるだけではなく、原口自身の手による自伝『楽しき思い出』（春秋社，1915 年）が資料として残されている。

この自伝の中には、初めて Thorndike に会ったときのこと、思いがけず PhD 候補として手続きが進んでしまったこと、Thorndike や Cattell の講義の様子、PhD 試問の様子、Cornell 大学に Titchener を訪ねたときのことなどが詳しく（しかも生き生きと）書かれている。しかし、このような個人の資料に基づいた事例研究は、ともすれば単なるエピソードの羅列に終わりがちで、他の事例との共通点や相違点を明確にできないという大きな問題点がある。

本研究では、残された資料に基づいた事例研究ではなく、異なる年代の日本人女性心理学者にインタビュー調査を行い、それを単なるエピソードとして収集するのではなく、質的研究の一つであるライフヒストリー研究の枠組みの中で検討することに努めた。

研究期間の１年目（平成 24 年度）は、第一線を引退した高齢（満 75 歳以上）の日本人女性心理学者９名を対象とし、連絡が取れ承諾していただけた６名を対象にインタビュー調査を行った。もともと、これら対象者の選定基準は、『日本心理学会会員名簿 2010 年版』に掲載されていた終身会員とした。すなわち、同会員名簿によれば、終身会員とは、「満 75 歳以上、かつ正会員在籍年数 40 年以

上の者で、本人の申し出により理事会の承認を得た個人」とされている。研究申請時点（2010 年現在）では、同会員名簿によれば、204 名の終身会員のうち、女性の終身会員は 24 名であったので、この 24 名に連絡を試みた。

研究期間の２年目（平成 25 年度）の対象者の選定基準は、現役で活躍している中高年の日本人女性心理学者とし、『日本心理学会会員名簿 2010 年版』に掲載されていた専門別代議員 23 名であった。専門別代議員とは、選挙により選ばれ「正会員を代表して総会に出席し、審議事項を議決する」とされている。研究申請時点（2010 年現在）では、専門別代議員 134 名中、女性は 25 名であり、そのうち、大学関係者は 23 名であったので、この 23 名に連絡を試みた。この 23 名のうち、連絡が取れ承諾していただけた 18 名の対象にインタビュー調査を行った。なお、このうちの５名は研究期間の１年目（平成 24 年度）に前倒しでインタビューを行い、２年目（平成 25 年度）には、残りの予定していた 18 名の対象者のうち、連絡が取れ承諾していただけた６名に加え、ほぼ同年代の 2 名の計８名の女性心理学者にインタビュー調査を行った。

いずれも研究代表者自身がインタビュアーとして 90 分程度の非構造化インタビューを行い、許可を得た上で録音を行った。ただし、事前に大まかなインタビュー項目として、以下の８項目を知らせておき、インタビュー当日にはこれら８項目について主に尋ねた。

・心理学を志したきっかけ
・大学、大学院等で受けた教育の内容（たとえば、恩師の指導法など）
・研究テーマの決定の経緯（特に外国の研究との関連）
・これまでの研究テーマの変遷（特に外国の研究との関連）
・外国の研究者との主な交流（たとえば、文通、国際学会出席、留学など）
・女性研究者ならではの苦労
・心がけてきた教育・研究活動（授業、弟子に対する論文指導など）
・若い研究者（特に女性研究者）に伝えたいこと

４．研究成果

インタビュー記録をもとに分析したところ、第一線を引退した高齢女性心理学者（おおむね 75 歳以上）、高年女性心理学者（おおむね 50 歳～60 歳程度）、中年女性心理学者（おおむね 40 歳代）という３つの年代の間には、いくつかの興味深い明確な違いが認められた。ここでは本研究の主たる目的に関連した以下の２点について触れることにする。

まず第１に、受けてきた心理学教育においては、高齢女性心理学者たちがドイツ語などの原典購読を含む欧米流の訓練を受けた傾向が強かったのに対して、高年女性心理学者たちは同様の訓練を受けたもののドイツ語などの非英語圏の心理学に触れることが少なくなり、中年女性心理学者の場合は、ほぼ全員が英語圏の心理学教育にシフトする傾向が認められた。この傾向に連動して、欧米の心理学者との直接的な交流に関しては、高齢女性心理学者、高年女性心理学者、中年女性心理学者の順に、次第に増えていく傾向が見受けられた（ただし、主に英語圏の心理学者に限定されていた）。実際、国際学会での発表数も、若い女性心理学者の方が多くなる傾向にあった。

第２に、女性心理学者ならではの苦労（ジェンダー）という点に関しては、いわゆる家事と育児の負担がほぼ全員に指摘されはしたものの、概して、高年女性心理学者の大変な苦労が感じられたのに対して、（例外はあるものの）高齢女性心理学者や中年女性心理学者では、その程度は（個人差はあるものの）

高年女性心理学者ほどではないようであった。これは主として、高齢女性心理学者の時代は圧倒的に男性心理学者中心（しかも特定の大学出身者中心）であって、はなから女性の活躍が期待されていなかったことと関連するようであった。一方、高年女性心理学者はこのような風潮が残りながらも、女性の社会進出が始まり、彼女たちが男女平等へ果敢に挑戦したという状況があったように思われる。この高年女性心理学者の活躍を受けて、男女平等の思想も根づいた時代を過ごしている中年女性心理学者は、研究や職場においての苦労が比較的少なくなったようである。言い換えれば、いわゆる女性のライフコースの世代差がこれらの根底にあると言えよう。ただし、これらの家事と育児の負担問題は、世代差もあるものの、職場ごとに（女性の活躍についてどのように考える人間がいるのかなどが）異なっているだけではなく、配偶者男性の女性への関係性の問題も忘れてはならないと思われた。現状では、個々の女性心理学者がどのような人間関係に位置づけられるかによって、家事と育児の負担はまったく異なってしまっている。したがって、結論的には、偶然の要素の強い個々の人間関係に頼るのではなく、体系立てられた社会システムの構築こそが、ジェンダーの問題を克服する手立てになると言えよう。

これらの研究成果と今後の展望については、以下の３つの点にまとめることができる。言うまでもなく、交流とは双方向に影響を与え合うものである。したがって、第１に、本研究で検討した日本人女性心理学者と欧米の心理学者との交流史から、日本の心理学への欧米からの影響だけではなく、欧米の心理学への日本からの影響も解明することが期待される。この点に関しては、世代を経るにしたがって、わずかずつとは言え、そのような影響も生まれつつある。今後、このような日本人女性心理学者からの影響をより詳細に明らかにすることで、欧米のエスノセントリズムと男性偏重のジェンダーバイアスにとらわれた心理学史研究から脱却し、現在の心理学史研究を再構築する足がかりを得ることができるはずである。

第２に、本研究を出発点として、将来的には、より大きな研究組織を構成した上で、女性心理学者だけに限定せずに、多くの日本人心理学者と欧米の心理学者との交流史を詳細に調べるという大がかりなプロジェクトへの発展が必要であろう。とりわけ、女性のライフヒストリー研究の視点をも併せもった本研究からは、心理学の分野だけにとどまらず、他分野（たとえば、社会学やフェミニズム研究など）も巻き込んだ新たな学際的研究として確立する可能性が内在していると思われる。

第３に、心理学史の学習や研究において、本研究で明確にされたように、日本人女性心理学者と欧米の心理学者との交流史を主軸に置くことで、日本人の学生であれ（心理学史を専門としない）心理学者であれ、心理学史を学ぶ意欲が強く喚起されると思われた。実際、研究期間の１年目の成果の一部を、研究代表者の所属大学の心理学史の授業の中で取り上げることで、受講生たちは問題意識を明確に持てたようである。このように明確な問題意識を持つことによって、心理学史を深く学ぶことが可能となり、新しい理論や研究方法を生みだすための活動が促され、その結果、欧米の後追いや追試ではなく、日本独自の独創性の高い心理学研究を活性化することをも今後大いに期待できよう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

① 高橋雅延　大学における心理学史教育の視座　聖心女子大学論叢、査読無、124, 2014（印刷中）